

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520211

研究課題名（和文）

森川竹ケイ詞の研究 訳注と整理

研究課題名（英文）

The Study of Ci Poetry by MORIKAWA Chikukei

研究代表者

萩原 正樹（MASAKI HAGIWARA）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：20250532

研究成果の概要（和文）：

竹ケイの詞集『夢餘稿』を底本として研究を進めたが、『夢餘稿』未収の作品も有り、また『夢餘稿』に収録されていても雑誌掲載時と本文が異なっていることもあって、正確な訳注を作成するためには諸種の雑誌掲載本文との厳密な校訂が必要である。この整理校訂作業はほぼ予定通り完了し、竹ケイ詞の底本を作成することができた。また竹ケイは、友人・知人との贈答や唱酬の作品を多く作っており、それらの綿密な分析を通して竹ケイの事迹を編年化してとらえる作業も進め、竹ケイの前半生を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This Research is advanced by using the poetical works "Muyokou" of Chikukei as a text. But, there is also works which is not recorded on "Muyokou." Moreover, even if recorded on "Muyokou", the time of being published at various magazines may differ from the text. In order to create exact translation and annotation, strict revision with the text published at various magazines is required. The work of this arrangement and revision was completed mostly as planned. The text of Chikukei's Ci poetry was able to be created.

Moreover, Chikukei is making much exchange of poetry with a friend and an acquaintance, and many works of chorus. Through in-depth analysis of those works, The biography of Chikukei was able to be ranked with chronological order. So the first half of its life of Chikukei was clarified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：森川竹ケイ、明治漢詩、詞、

1. 研究開始当初の背景

国内における日本漢文学の研究において、

詞については従来ほとんど取り上げられることがなかった。研究成果も、神田喜一郎『日本における中国文学』以外はまことに寥寥たるもので、近年では「五山二留学僧の填詞製作 竜山・中庵の木蘭花」野川博之、『中国文学研究』25、1999、「化政期の詩人と填詞」福島理子、『帝塚山学院大学日本文学研究』30、1999、「田能村竹田填詞研究階梯 江戸填詞の魅力」池澤一郎、『明治大学教養論集』368、2003、など、また研究代表者執筆の数編の論文があるに過ぎない。

日本詞の研究は、日本よりもむしろ中国において盛んに行われている。中国において、最初に日本詞の価値を見出し、研究の先鞭をつけられたのは、『唐宋詞人年譜』等の著書で知られる著名な詞学研究者、故夏承燾氏であった。夏氏は日本詞やまた朝鮮半島・ベトナムなど域外の詞の研究を続けられ、1980年には「論域外詞絶句九首」(『文献』四)、また1981年には夏承燾選校、張珍懷等注釈『域外詞選』(書目文庫出版社)を発売される。これを契機として、張珍懷「日本的詞学」(『詞学』二、1983)、彭黎明「中日詞人交往事略」(『河北学刊』1985年2期)などの論文や彭黎明等選注『日本詞選』(岳麓書社、1985)などが陸續と公刊され、最近では明治大正期の三家(森槐南・高野竹隱・森川竹ケイ)のほぼ全詞に注釈を加えた張珍懷箋注、施議対審訂『日本三家詞箋注』(澳門中華詩詞学会、2003)も出版されている。以上のように中国の学者による日本詞研究は一定の成果を挙げているのであるが、作品研究の基本となる本文研究においては問題があると言わざるをえない。中国在住の研究者にとって、江戸期以前の古い版本や明治大正期の漢詩文雑誌等を閲覧するのはきわめて困難であり、彼らの多くは日本詞作品の底本として『日本における中国文学』を用い、その本文に依拠して研究を行っているのである。『日本における中国文学』には誤謬や遺漏も多く、これのみに依拠した研究は不完全なものと言わねばなるまい。

このため、日本詞全作品の信頼できる本文や基礎データを内外に提供することが喫緊の課題であると考え、日本詞の集成作業を行ってきたところである。今回はこの信頼できる本文や基礎データをもととして、日本詞の諸相、具体的には森川竹ケイの作品と詞学をとらえていきたい。

日本詞の精華とも言える森川竹ケイの作品は、特に日本ではほとんど知られることがない。研究代表者は、これまで竹ケイの詞律論(「森川竹ケイの『欽定詞譜』批判」森川

竹ケイの『詞律大成』について)等)、詞論(「森川竹ケイの詞論研究について」)や伝記(「森川竹ケイ家世考」等)について研究を行ってきた。本研究においては、作品研究の基礎作業として竹ケイ詞の訳注を作成していきたい。この訳注は、研究代表者の今後の研究の基礎となると同時に、内外の多くの研究者にとっても利用できるものとなるであろう。詞の訳注は、中国文学の専門家にとってもなかなか困難で、唐宋詞についても現在日本国内でそれほど多くの訳注書が流布しているわけではない。研究代表者は、宋词研究会という研究会を組織し、その機関誌『風絮』において龍榆生『唐宋名家詞選』の訳注を担当している。その知識と経験を生かしながら竹ケイ詞の訳注を進めていきたいと考えた。

2. 研究の目的

研究代表者は、日本の詞を日本漢文学史・日中文化交流史の中で正しく位置づけ、その高い文化的意義を広く内外に示したい、という研究構想を持っている。この構想を実現するためには、まずすべての日本の詞を正確かつ網羅的に収集整理して、その作品の全貌を明らかにする必要がある。平成18~19年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(研究課題名「日本における詞の収集と整理」、課題番号18520112)においてその作業を行い、一定の成果をあげた。また平成21年度には研究代表者(萩原正樹)の所属大学である立命館大学より研究資金(研究推進プログラム「若手・スタートアップ」)を得て、継続して日本詞の収集と整理を行っている。今後は以上の研究による成果を踏まえ、日本詞の具体的な実態について詳細な研究を進めていきたいと考えている。まず本研究においては、日本における唯一の填詞専門家と言われる森川竹ケイの作品の訳注を作成し、日本詞の一つの頂点を示している彼の作品の文学的な価値を明らかにしたい。その作品世界を明らかにすることによって、今後『詞律大成』に代表される彼の詞学研究成果についても正当な評価を与えていけるものと考える。

3. 研究の方法

竹ケイ詞の訳注完成という研究目的を達成するために、国内及び台湾や中国等の所蔵機関での文献調査をもとに、竹ケイ詞の本文校訂を厳密に行い、詩語の典故調査、作品の背景や竹ケイの伝記の調査などを行っていった。

初年度は、まず国内外において文献調査を行い、竹ケイ詞の本文校訂を厳密に行うことから開始した。

竹ケイの詞は、生前に刊行された竹ケイの詩集『得間集』にはわずかにしか収められず、死後に久保天随によりまとめられた『夢餘稿』に多く収録されている。『夢餘稿』は稿本でしか残されず、水原渭江氏による影印本があり、本研究においてはこの影印本を底本として訳注作業を進めていった。

ただ『夢餘稿』には収録されなかった作品も有り、また『夢餘稿』に収録されていても雑誌掲載時と本文が異なっている場合などもしばしば見られ、諸種の雑誌掲載本文との厳密な校訂が必要である。

そのため、特に東京を中心に各地の公共図書館や大学図書館に所蔵されている雑誌（『鷗夢新誌』、『詩苑』、『随鷗集』等）を詳細に調査する必要がある。また台湾の台湾大学図書館久保文庫には森川竹ケイの旧蔵書がある程度まとまって収められており、これらも視野に入れて研究を進めた。

その後、竹ケイ詞の訳注作業に入ってしまった。竹ケイ詞はすべて六百首あまり残されており、それらの一つ一つに丁寧な訳注を施していくことを目標とする。そのために必要な辞書や明治大正期の文献、また原文のデジタルデータ等を購入し、それらを利用しながら正確な訳注を作成していく。

的確な訳注を作っていくためには、他の研究者の目によるチェック作業も欠かすことができない。本研究では、研究分担者を設けられないが、適宜協力者を得て、厳密に訳注作業を進めていった。特に宋词研究会の機関誌『風絮』において、龍榆生『唐宋名家詞選』の訳注を担当している方々に協力を仰ぎ、チェックを行っていただいた。また、大学院生や若い研究者の参加を得て、継続的に読書会を開催し、そこでの議論を生かしながら訳注を作っていた。

ただ竹ケイ詞の訳注を進めるうちに、竹ケイ周辺の人物がしばしば竹ケイ詞に登場し、彼らとの交友の親密度や彼らの伝記・事跡等を了解しなければ竹ケイ詞を具体的に理解することが難しいことが分かってきた。そこで竹ケイ詞の訳注を進めるとともに、竹ケイと周辺人物との交渉、具体的には人物関係や会合などを可能な限り詳細に調べることとし、竹ケイの詳細な年譜を作成することとした。ただなにぶん時間が経過しているために資料も限られており、国内の資料を探すことも困難な場合が多く、なお年譜も完成していない状況である。年譜作成によって得られた知見をもとに竹ケイの詩詞を読み進める作業も行ってきたが、研究期間中に全作品に訳注を施すことはできなかった。これについては次年度以降も継続して作業を進めていきたい。年譜の続稿及び訳注についてはなお未発表であるが、今後順に発表していく予定で

ある。

4. 研究成果

今回の研究を通して、下記のような成果を挙げることができた。

(1)

森川竹ケイ詞の本文を校訂して整理することができた。先にも触れたように竹ケイの詞集には『夢餘稿』があるが、『夢餘稿』には収録されなかった作品や、『夢餘稿』に収録されていても雑誌掲載時と本文が異なっている作品も多く、それらの整理校訂が必要であった。今回の研究を通して、その本文をおおむね確定することができた。その確定した本文からは、竹ケイがいかに腐心して詞を作っていたかについて知ることができる。詞の本文を見てまず気付くのは、その使用している詞牌の多さである。詞は中国の唐宋代に流行して盛んに歌われ、元代にも一部歌われて明代初期に及ぶが、明代中葉からはその歌唱法が途絶え、作者は歌うものとしてではなく読み書きする韻文として詞を作るようになった。そのため明代以降は一部の専門家以外はあまり多種の詞牌は用いない傾向にあったのであるが、竹ケイは相当数の詞牌を用いて詞を作っている。一部の頻用詞牌以外、ほぼ一調に一作というほど盛んに多種の詞牌を試みており、これはおそらく竹ケイが若年より詞牌の研究に精力を注ぎ込んでおり、そのために習作として多くの詞牌に填詞を試みたのであろうと思われる。また同一詞牌においても、さまざまな異体の作も残しており、これもやはり詞牌研究の一環と言えるであろう。こうして作られた竹ケイの詞は、おおむね韻律に合っており、竹ケイの並々ならぬ詞作の力量を窺うことができるのである。

(2)

詞は唐宋代に流行した韻文であるから、竹ケイの作品に唐宋代の詞の影響が見られることはいわば当然と言える。ただ今回の調査を通して、竹ケイの作品は唐宋代の詞だけではなく、清代の詞の影響が強く見られることを確認することができた。これは当時の詩壇の趨勢から考えれば当然予想がつくことなのではあるが、注釈を作る作業を通してあらためて再確認できたことである。さらに竹ケイが、従来の詞には詠じられないような内容、たとえば地震や洪水などの災害をうたうような作品を作っており、これらの作品は、詞を自らの最も得意な韻文形式とする竹ケイならではの詠じられない、きわめて特徴的なものであることを理解することができた。

(3)

竹ケイ詞に注釈を附す過程において、竹ケ

イ周辺の人物とその交流の跡を探ることができた。竹ケイは若い頃よりその詩詞の才を発揮し、青年詩人として世に認められている。また若年から詩社を組織し、自らの経営する雑誌の発刊を続けた。そのため彼の元には東京在住の詩人はもちろん、地方出身の詩人たちも多く集まって、盛んに交流がもたれた。竹ケイの詞にはそのような人物や会合などがよく詠じられており、それらの一端を解明することができた。具体的には、竹ケイの伝記を年譜形式で整理し、そこに彼と交流のあった人物の動向も可能な限り書き加え、明治詩壇の厚みを理解できるような「年譜稿」を作成し、現在もその作成作業を進めている。

(4)

上記とも関連するが、竹ケイの親友の一人に中村花瘦があり、恐らくその中村花瘦を通して硯友社の巖谷小波とも交友があったことを確認することができた。明治初期の文学結社として硯友社は最も著名なものの一つであり、言文一致をはじめとして近代文学の発展に大きな影響を与えている。その硯友社の作家たちと漢詩作家である竹ケイとの交流は、明治の文学動向の一端を示すものとして興味深いものがある。ただ巖谷小波の方はあまり竹ケイに触れておらず、日記を除いてほとんど竹ケイに言及していないのは残念である(野口寧斎については著書中で言及しているが)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

1. 森川竹ケイ年譜稿(中) 萩原正樹 学林第56号 査読有 2013年1月 p p. 60~117

2. 唐宋詞の名句 『草堂詩餘』から 萩原正樹 アジア遊学第152号東アジアの短詩形文学 査読有 2012年5月 p p. 69~78

3. 森川竹ケイ年譜稿(上) 萩原正樹 学林第53・54号 査読有 2011年12月 p p. 484~524

4. 蕪城秋雪及其《香草墨縁》 萩原正樹、董偉華訳、路璐校閲 詞学第26輯 査読有 2011年12月 p p. 225~250

5. 森川竹ケイ研究ノート 中村花瘦と森川竹ケイ 萩原正樹 学林第52号 査読有 2010年12月 p p. 85~102

6. 蕪城秋雪の『香草墨縁』について 萩原正樹 学林第51号 査読有 2010年6月 p p. 21~54

〔学会発表〕(計3件)

1. 森川竹ケイ年譜稿 萩原正樹 中国藝文研究会 2011年7月24日 立命館大学・京都府

2. 巖谷小波と森川竹ケイ 萩原正樹 中国藝文研究会 2011年3月20日 立命館大学・京都府

3. 明・周瑛編『詞學筌蹄』について 萩原正樹 中国藝文研究会 2010年4月4日 立命館大学・京都府

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

6. 研究組織

(1) 研究代表者

萩原正樹 (HAGIWARA MASAKI)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号: 20250532

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号: